南北太平記圖會 貳編 參

伊
1989
11

南北大平記圖會巻之十

貳編　目次

千壽遁鎌倉竹若死浮島
義益挑言試義貞
鎌倉殿中論定課役
義貞斬両使起義兵
源平交兵戰入間河
義貞進兵陣久米川
義貞拆兵退堀金
三浦叟黨加新田陣
義勝謀破鎌倉勢
安保横溝救慧性

門 ヘ 13
番 1989
巻 11

義貞大軍乱入鎌倉
本間出不意討宗氏
義貞誠心退海潮
為基大戰由井濵
鎌倉諸將闘死大略
聖秀守忠節死義
盛島昊亀壽忍信州
慧性詐死落奥州
高重参向南山雲禪師
高重謀欲討義貞
島重別腸魁冥府
北條一門滅東勝寺

帝国図書館蔵書

南北太平圖會巻之十

貳篇

千壽遁鎌倉竹若死浮島　義益挑言試義貞

足利治部大輔高氏欲ゝ成被申々る事。道遠くれば飛脚未到来。鎌倉うゝ曾て其沙汰も無り。元弘三年（新帝正慶二年）五月二日の夜半ふ。足利の二男千寿王丸大藏谷を落く行方不知。成被申る。是も足利の良役紀の五左エ門。密ゝ具ゝ進らせ。京都ハ道遠くれば。若途中欲ゝ行逢てハ事六ヶ鋪ゝて甲州の源氏を頼んで忍び進らせるべし。依之鎌倉中の貴賤。ざわめく大事出来りぬるとて。騒動不斜。鎌倉已ゝ如斯なりうといで。京都の事い未分明の説も在りくれば。毎事無心元ゝ長嵯勘解由左エ門入道と。御方木ユ左エ門入道と。両使ゝて被上々る。処ゝ京都の早馬ゝ駿河の高橋ゝそぞ行合る。四月二十七日の合戦ゝ名越殿ハ被

対ひ。足利殿い反逆して欲し成ひぬと告ひ給へば扨い一大事く鎌倉の事も不審ゝて。西使い取く返し関東へと下り給ふ爰に島氏の長男竹若殿い伊豆の御山に御坐ゝるが伯父の宰相法印良遍児に宿十三人山伏の姿に成て潜に上洛せゝまゝ給ふ。浮島が原にて端く彼西使にぞ行合彼申々る。振方長崎事の子細を尋問に及ぶんと思ふ処に宰相如何用章られゝん今是非馬上にて腹切く道の傍にぞ臥彼申々る西使是を見て去れそ内に野心ある人い外に遁ゝ辞ゝて。竹若丸を刺殺し宿十三人の頸を刎て浮島が原にをてぞ通り給ふ。是い扨亜新田小太郎義貞去る三月十一日大塔宮より綸旨を賜ひ千剣破より虚病して本国へ帰り相州一家を亡さんとを謀り彼申とのべど。何程の一大事進に然ぜん様もなきもはる所に。越後の國の住人里見修理亮義益為見参とて三月二十一日の晩景に来着を義貞不審思ひく。舟田入道善昌に彼申々る。當時

數度の上洛に疲を家をまどさ人の。今何の事もうきゝに見参の為にとて来義せゝ事如何うんと尋らまゝる。舟田も眉を皺めて申様。去ぬ候里見殿の今何の用共うきゝに来りうゝる事にて不思議に侍へ但し此人も相州の執事に対て恨む事ある人に侍へば。大事を彼思立義もやい給ん。詳御心得ゆへ先祭見参いゝ可見申にてゆして相待所に里見果て舟田が宿所に来り何とゝく物語數刻に及びゝゝ。里見膝近く居寄ゝ。天下近年の乱諸人の煩ひ最も欲に余り有事を申出れば。舟田さまいにそと思ひ武家の政事も左こそ侍へども。公家の軍立も墓々敷ゝぬ覚候。良将を撰こそ部度を給へば世い静る事も侍へべきと。西国の中に楠正成の外に人い都く良将のゝく侍るやんと何とゝく探りゝゝ。里見尚近く居寄てゆざとに西国うれべとて良将の器に絶ゝる者多等も侍へらん。然れども御存の如く和国の凡俗い其子孫にあゝざれば人不従い去ば西国

の中源平両家の内何まの者う人夫と彼思ふ者の侍るやらん。東國の内ゝ猶侍らんと申も。舟田弥心付く猶も彼が心中を伺ひ知ん為ゝ。東国ゝ推う侍らんと尋ねれば里見答て云東国ゝ若思ひ立うぐ何程も源平の子孫多く侍るゝ。あらく美へひゝ推そくして新田殿も其中の一人ゝそゝそひへあゝ恐ゝ乗由枝巣の幸を申出ひの哉と申て止ぬ。舟田左らゝめ躰ゝりて。里見より先へ義貞ゝ見へくゝれを語りそれば義貞心中ゝ大ゝ喜び然で常よりも奇羅めさて饗もゝゝて其用意り被及ゝる所へ里見已ゝ来く。酒三献の後又義貞が杯を受時常よりも礼義を正ゝて頂戴せゝれゝゝば。義貞心驚き何事有て左様の礼を受ふぞと被申ゝれば里見答て曰唯存ぜる子細の侍るゝり。最初上宮太子未七歳ゝ成せうひゝ時。新羅の相人来て奉拝太子。此君ハ救世観音ゝて御在うゝと申せゝゝ社義りひとゝて大ゝ矣ひゝゝば。義貞貴辺ハ相人ふて左や某ハ我身うぐゝ何如うる佛善薩の再来ゝも不覚ゝて又大ゝ矣ゝれゝる。里見打黙さ某ゝて相人ゝて侍ゝゝて其夜ハ打ゝめ義貞も猶心有て思ひゝれば次の日少ゝ引出物うど有ゝる程ゝ。里見一礼の為ゝ夜ゝ入て来り。隠うゝ辺りの人を除させ義貞ゝ申入ゝる当時の事相州の悪逆不可勝計義と金石ゝ類一事を天道ゝ任せて為朝家ゝ命を軽んぜる謀を被面ひぐ於某二心あぐうぐひ左ゝて思召立うぐ。越後一州の御一族推う與一申さぬ者可有哉。其外相州ゝ恨を含む輩皆馳可参うれば。御勢ゝ不足ハいまぐ。先舩上へ綸旨を申進せうと謀細くゝ語り。猶も某う心中詠りと思召べうぐとて。神佛ゝ誓て言の誓ひをうゝぬ。義貞思ふ所其所謂うきゝあゝぐゝて。執事舩田善昌と呼く此事を評一。舎弟股屋義助其外大舘江田堀口岩松桃井等頼五六人ゝ申合せ。密ゝ里見と越後へ帰一る

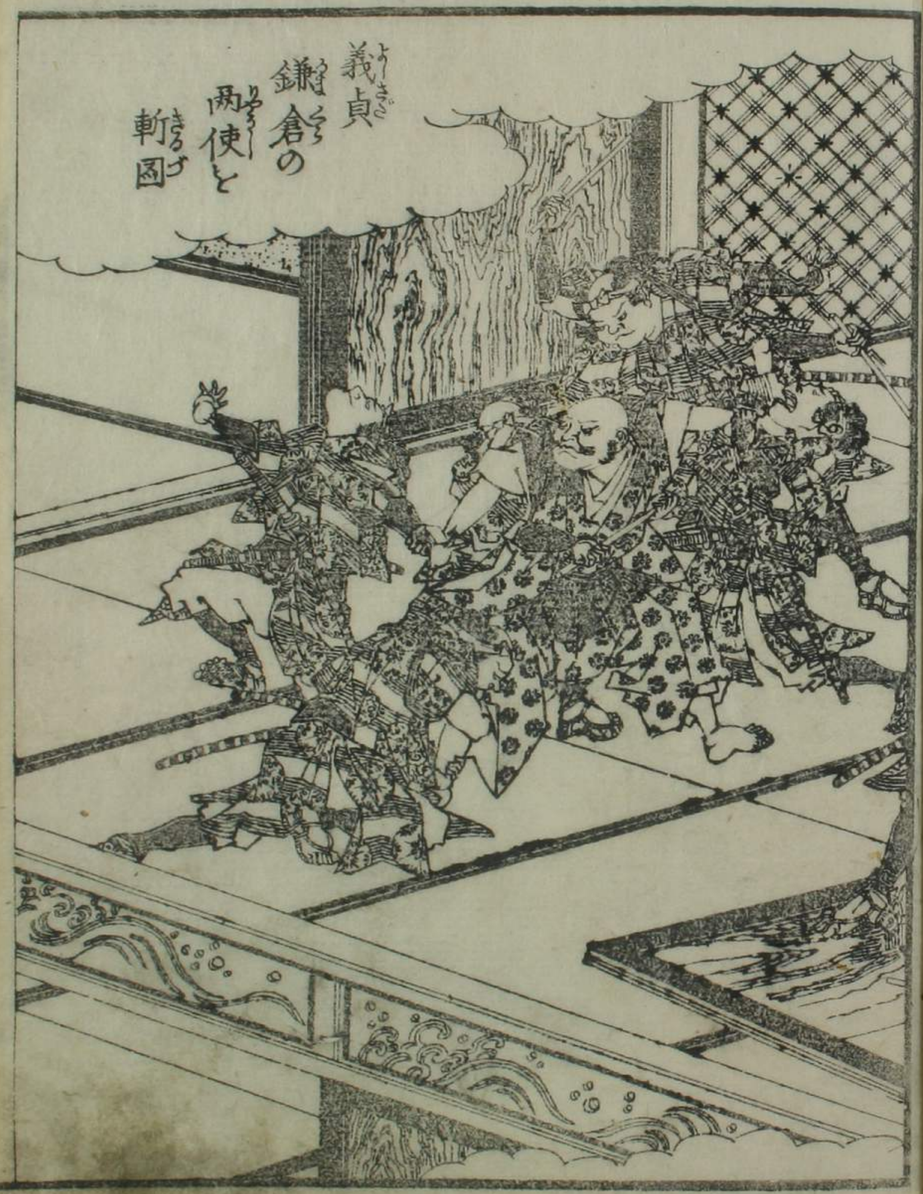
鎌倉殿中論定軍課

義貞斬鎧倉両使起義兵

斯る企有とゝ不慮高時の舎弟左近大夫入道惠性を大将として。十万余騎を差副て京都へ上せ。幾内西国の乱を可静とて。武蔵上野安房上總常陸下野六ケ国の勢を可催段宗徒の一族評定衆打寄て商議あり。れども。皆愚案に落てたゞ義二ツもう。長崎勘解由左エ門為基ゞ云。所大事此時にそい得べ。唯々も上り侍りゑ去ゞ近年數度の上雒に國虚して上下皆困窮に罷成ひ上ハ如何も叶ひ侍ら進退奥に極りて覚へ。先千剣破の寄手に御下知あり。主上上皇を是へ行幸成奉り手を送りいゞ。京都より先朝の節度の下り侍らざる事ハあるまじ。其時箱根にて支へ侍らんにハ運の勝負にて治乱一挙に可在存ひとあり。れば。此義可然と一同せに。盥田陸奥入道申けゝ。仰左にいへども伊豆より西悉く敵に属ひゞ。関八州の中も無心元事に存候。夫より各頭人評定衆の畜へ積ゞ諸財ハ此時の用に不待共各此時に為出ゞ。軍勢に配當して京都征伐の助けとすべ。先某の貯ゞ

さゝ白銀二千両黄金七百両米二千石ぞ出し侍らん是近年の畜へゝ。軍難義に及び若鎌倉滅亡に及ぶ支あゞ惜ゞ財物皆敵の所得とそ成侍らんとあり。れば。相州の舎弟惠性進ゝ出ゝ云。奥州入道の申係左も と覚へ侍ゞ。某今度ハ上雒の事にハ得ゞ手の軍勢九三万余騎ゞ彼等ゞ所に放てハ此身の畜へて上り侍りゑん。其上外様の侍どもの上り煎らん に被遣ゝ。て侍まゞ奥州入道に劣るまじ。彼入道の被出ひゝ分をゞ出し参らせ侍らんずゝ。夫ゝも先相州の御倉を被開。近国困窮の者共に賞をあゝ其心を勇めゝ。と被申れば諸人此義実もと同て其ゝ何程雖ハ如何程ゝ。長崎四郎喜入道以ての外に気色を損て申ゝハ相州の御倉被開ひ事難叶侍ゞ當時御領ゝ。ども墓々しく事に存候夫より各頭人評定衆の畜へ積ゞ諸財ハ此時の用に不待共各此時に為出ゞ。軍勢に配當して京都征伐の助けとすべ。先某の貯ゞ

不侍。其上局々の御日夜の御遊に数千万の財物や費のと彼思召やら米等の類ハ少し侍とても。是ハ秋さの御用領うう。當て見るゝ猶少ハ不足と。前代の相州の様ハ不侍と咎へられば。尤近大夫入道恵性大に驚き好々當時の御畜ハ尤も侍りうん。先代の相州国の虚うゝん時の為。又ハ乱の時り嘗へと行んが為。貧しき者を扶助せんが為に畜うひらる御倉ハ如何と宣へば長崎四郎喜夫ハ免して侍る。彼ハ角成て侍まバ今ハ無ひと申ぬ。恵性これを聞て惘たる物をも不謂。無奥急うて あ[illegible]る処に。四郎喜が子息四郎左ヱ門島賢進に出不被謂事ども宣ひて古へより例うき事を執計仕うるむより。近国の庄園に臨時天役を以て軍勢の兵粮も仕侍らん。無左ては叉難成と申ゝられば。盥田陸奥入道申ゝるは。近年ハ打續て幾内西國の乱を拂んと軍勢を被催事数度すり。依之国虚して民貧しく國人等民財を掠めむ[illegible]る。此上に今又臨時の天役を被懸るゞ。人の心変じて鎌倉の政道を申者諸国に多出来らん。然らば武家の軍危〳〵そひと難成。長崎高賢自餘の異見をも不待て。国の土地を食ふて国の難を去んと欲するを恨む者や侍らん。唯某に御仕せ少へと強く申るゝぞ。驕て近国へ天役を可被懸と定りるるそうゝ。因之早々近国近御夫〳〵へ使を以て責ゝるる。中にも新田庄世良田ハ有徳の者多〳〵そ。出雲介親連黒沼彦四郎入道を使ハ六万貫を五日ゞ中に可沙汰と堅く下知を傳へる。是ハ長岩高賢強に新田義貞と不和の故あり依之少の領所ゝるゝと。有徳の者あるゝを謂立かく廣大に歩役をまる所うう。兩使先彼所に往て大勢を庄家に放入て譴責まる事法に過ぎうう。新田義貞是を聞て我館の辺りと雑人の馬の蹄に過せつる事ゝそ返〳〵も無念うれいぞう上見可恥と。数多の人を差向られ彼両使を忽生捕て。出雲介と誡め置。黒沼入道


義貞
鎌倉の
両使と
斬図

の首を刎て門日の暮程に世良田の里中にて被懸るる供廻りの者ども這く鎌倉へ北帰り右の赴具に申さるるれば相摸入道大に怒りて彼申るる当家執世已に九代源内悉其命に不随こらの支る事数に近代遠境動もれば此命に不随近国常に下知を軽んぜる事奇怪なり剰藩屏の中ふして使節を誅戮せる条罪科軽からず此時若緩その沙汰を致せば大逆の基と成べし則上野武蔵両国の勢に仰せて新田太郎義貞舎弟服屋次郎義助を討て可進ぜて彼下知義貞是を聞て宗徒の一族達を集て此事如何あるべきと評定せられるるに異儀區々ふして不一定或ひは沼田の庄を要害して利根河を前に当て敵を待んと云義もあり又越後国に大略当家の一族充満されば津張郡へ打越て上田山を伐塞ぎ軍勢を蒐催して防と異見不定なるを服屋次郎義助暫く思案して進み出て彼申るるは凡弓矢の道死を軽んじて名を重んぜるを以て義とせり。就中北條天下の権を執て百六十余年干今至るまで武威盛ふ振ふて其命を重せずして去処なる。去て利根河をさるのて防るも運尽うべ叶ふまじ。又越後國の一族を憑さるるも人の意不和なるべ不き歟非ざる指さる事も仕出さるる物故に。此彼へ落行て新田の某に相摸守の使を切さるる。外に依て他国へ逃て被討さるるうんど天下の人口に入んと支て口惜なれ。迚も討死をせんぜる命を義臣といられて朝家の為に捨さるんは無らん跡をも勇名八子孫の面を令悦名を路徑の尸を可清先立て綸旨を彼下めるは何の用に可当各宣旨を額に当て運命を天に任せ。唯一騎うるも國中へ打出て義兵を挙たらんに勢附べ速に鎌倉を可責落勢不附べ唯鎌倉を枕として討死ナベ。自是外の事やあるべきと。義を先に勇を宗として被申ける。

當座の一族三十余人皆此義にて同ドくるたあくびして甲州信及の
地へハ江田大館を以て牒し合せ野州ハ小山名次郎よりも申相及
ハ密に堀口を以て事を計せくるし凡同心の大名二十七人とぞ聞え
くる此上ハ鎌倉へ事の漏聞へぬ前に急ぎ打立べしとて同五月八日の
夜の刻に生品明神の御前にて旗を挙綸旨を披て三度是を拜し
笠懸野へ打出彼申くる相從ふ氏族の人々ハ大館次郎宗氏同嫡
子孫次郎幸氏二男弥次郎氏明三男彦次郎氏兼堀口三郎貞満
山名次郎忠家岩松三郎經家里見五郎義嶋脇屋義助江田三郎
光義同四郎行義桃井次郎尚義太郎盛之武田五郎信義是
等を宗徒の輩として其外船田入道善昌由良新左エ門光氏長濱
六郎左エ門其瓜生左エ門忠良篠塚伊賀守重長互新左エ門早
勝畑六郎左エ門時能名張八郎某等一騎當千の兵都合僅に百
五十騎あり此勢にて何如と進み得ぶる処に其日の晩景に利根
河の方より馬物の具奏に見へくる兵二千騎計煙を立て馳来るす
くや敵よと目を附て見まゐ敵にハあらで越後国の一族里見修理亮
義益島山左京亮氏頼大井田遠江守經隆田中大膳亮氏政羽川越
中守時房等の人々にてぞ坐しくる義貞大に悦び馬を磬て彼申け
るハ此事兼てより其企ハ有うぐ昨日今日とハ存ぜざりつるに俄
に事の変に依て思ひ立ひつる間告申さもうるに何として存ぜ
きるぞと問うひくれば大井田遠江守行隆馬を進め鞭壺に畏て
彼申くるハ依勅宣大義を思召立るく由兼りはくべ何として
加様に可馳参候去五日の御使として天狗山伏一人越後国中を
一日の間に觸回て通りはし間夜を日に継で馳参ての境を聞くる
者ハ皆明日の程にぞ参着仕候ひむぞん他国へ御出候ぐ且く彼

勢を御待候へしと答へて馬より下て各對面色代して人馬の息を休る。斯る処へ後陣の越後勢並に甲斐信濃の源氏共家々の旗を指連て。其勢五千余騎影數見へて馳来る。義貞義助不斜悦びて是偏に八幡大菩薩の擁護にようり。且くも不可逗留とて。同九日武藏國打越被申ふ。紀五良左エ門足利の子息千寿王殿を奠臣百余騎にて馳着る。是を始として上野下野上總常陸武藏の大名等同心の輩三十七人ようり。内十六人は代々地條家の恩を戴く者なれど。高時入道の不義に依て昔を忘れ今を恨て悉く新田に荷膽を。就中武州の大串稲毛等は代々相州の恩顧に浴する者共なれど。執事長寿に付て恨を含まるるよう。此度の催に加りる。其外相州の非義を悪む輩。不期に集り不謀に馳来て其日の暮程に二十萬七千余騎甲を並べ扣へ

源平交兵戦入間川　義貞進兵陣久米川

去ぬる新田小太郎義貞の募て憑む。四方八百里に餘まる武藏野ふ人馬共に充満て身を峙る処うさを打圍む勢なれば。天に飛鳥も翔ることを不得。地を走る獸も隠んとも為る処なし。草の原より出る月影は馬の鞍の上にかのめきて冑の袖に傾く。尾花が末を分る風も旗の影をひるめして繰の手静る事ぞなき。かくしこそ國々の早馬鎌倉へ打重て急と告る事櫛の歯を引が如し。是を聞て時の変化を計らぬ者は穴事也や何程の事か有べき。漢土天竺より寄来るといへども実も真にうべ。我朝秋津島の内より出て鎌倉殿を亡さんと謀る夷蟠蝦蟆車精衛填海とふ不異と欺合て亦物の心を辨へる人ぞもろや大事出来りぬ西國幾内の合戦未静ざるに。大敵亦藩籬の中より起まり。是伍子胥が呉王夫差を諫て語に。晋は瘡痏にして越は腹心の

病うつと云〻不異と恐合り。去程に京都へ討手を可被上旨を聞て。新田退治の沙汰計うり。同九日軍の評定有て翌日の巳刻より金沢武蔵守貞将に五萬余騎を差副て下河辺へ被下。是は先上総下総の勢を蒐て敵の後を攻んと。一方へは桜田治部大夫貞國を大将にて長崎次郎高重同四郎左エ門泰光加治二郎左エ門入道等に武蔵上野両国の勢六萬余騎を相副て上路より入間河へ被向。是は水沢と前に當て敵の渡さむ處を討んと。義貞以来東風閑にして。人皆弓箭を忘れうゝぶ如くうゝに。今始て干戈を動き珍〻しく兵共殊々〻く此を晴と出立るに。馬物具太刀刀皆照輝く計うれば。由々敷見物りぞ有る。路次に両日逗留有て同十一日の辰刻に武蔵国小手差原に打臨こ。遥に源氏の陣を見渡せば。其勢雲霞の如くして幾千万騎とも其數を不知。櫻田長寄案に相違やあらんと。馬を扣て不進得義

負も敵の勢を見積り被申けるは。敵軍を二つに分て前陣は一萬余騎を十二に備へり。後陣は五六里計退きて其勢の多少不分明。義貞此事如何と議せられ。舟田入道申様。暫御陣を不動して敵の変化を御覧可有こそ。敵の後陣大勢にて少〻前陣川を越て懸り来るべし。若敵味方の川を渡るを待ば後陣深〻しき勢に不可有と覚へ候と伸るに。服屋義助進み出て。東八州廣しとは大形国に限あり。国に限り有ば故に又人に限有。今御方五万に及ぶる軍士集りぬべ。警鎌倉勢數を尽して向ひ来る東八州の人に限あれば恐るゝに足ざる所なり。其上相州禅門自ら向ひ給へ共。先陣後陣都合三万余騎に過ぬべし。急ぎ河を越て戦を可変ぬ。若戦ひを決せざる間に高時禅門自出馬に及ぶ以の外の御大事可成。數年相州の命に随て彼軍を見るに。前後陣を數段に分る事是此度の

義貞大軍
入間川を渡て
鎌倉小
乱入の図

てあるべき鎌倉の軍法なり。然らば前陣より何も後陣の勢はく候。是を以て今を謀るに此後陣極て小勢と覚ゆ其上兵は鋒を大将は闇将を五将に不親何に依て勝の利有んや御方は敷手禅門を恨ん憤あらせんとあり人事骨髄に通ぬ。軍を進ん必定御方勝む事十ゐ九てはッあらじと被申ければ諸将一同に此義に服せ。義貞も左あるべ此方より河を渡さべしと。大館岩松に六千余騎を差副て入間川の上の瀬より渡し。大井田鳥山に七千余騎を相副て下の瀬より為渡大将義貞は由良江田に三千余騎を授けて先陣とし次に搦井早川一條板垣武田安田小山田六千余騎一勢々々中の瀬を渡し自は一萬五千余騎を率て初中後の備を不乱跡しを進ぬ又入間河の此方六町を退て一萬余騎を五つに備へ中陣は舎弟義助六千四百余騎前の左右は大江田千五百余騎里見八百余騎後の左右は田中千六百余騎堀口七百余騎あり。義貞則ち入間川を渡て瀬を後ふ当て屯を調へ備を定め御方前後の陣より繰波を充し鏑を射る敵の先陣は按田後陣は長崎なり。先陣は按田川より六町退て要害を前に当て陣を居謀あり げに見えし。源氏も無左右軍を不進平氏も敢て兵を不出義貞大井田鳥山の手の中より足軽を出して敵の化を見るに敵も足軽を出して戦しむ何加しても敵を呼出てこそ勝負を決べしと義貞次第に足軽に兵を益て戦しむる度数十度なりしかども平氏軍の備を乱さざる僅の兵を出しこられを會釈ず故に更に勝敗なく義貞の手ふ打取首六十餘級味方の討死を算ふれば二千余人に過ず。

義貞軍は明日ふたたび被申遣ければ平氏最も同じく軍を引上て入来河を前に当て陣を取れば源氏も引退き入間河を前に当て陣を居何も今日の合戦の物語して人馬の息を繕せ西陣互に篝を焼て明日

を遅しと待居たり。義貞も此夜敵の陣へ夜討を懸んと被申れども。諸将一日の制し止めるに程に。黙止被申しが如何にしても今日の合戦敵要害の地に陣を取りて心憎く見。明日は敵の要害の陣を味方の要害の陣とせて可戦各其用意して夜の中に兵を出さるべしと下知せられれば。舎弟義助某を左に存ひ。先陣賜はんと望まれる。義貞則ちこれを許されれば。義助一萬余騎を二手に分。大井田を先陣として寅の下刻に軍を出し。昨日敵の陣取りる要害を味方の物にし備へを定て相待たる。鎌倉勢へかゝる事とは夢にも知ず。卯の上刻に軍を出し。昨日陣取る要害の所あく戦もひとうとくと来懸りたる。不意大井田が勢時を出と揚られれば。篠倉勢大に驚き騒ぐ処を。大井田に懸よと下知して驀直に懸崩れば。篠倉の先陣足もなまるで皆敗々に成て北退く。此時卯の中刻の頃ひなり。桜田は八町余り引下て打たるる前に軍始りと見て時の声聞へれが急ぎ兵を進めて味方を助け。大井田が勢に打て懸る。義助是を見て南方を勇め桜田が勢と懸合て陰に閉陽に開きて戦ひられば。桜田が兵引色に成て散乱し。許に来し道に引返を。服屋大井田も一手に成て軍を乱し。余をまして追懸たり。爰に篠倉の後陣に扣へし長崎次郎高重は少し騒く気色もなく。剛に備て居たりたり。時分はよしと味方を揉寄。乱を立たる服屋大井田が勢に割て入。右に透り左に當て前を崩し後を靡けあまたたび。服屋大井田が軍勢悉く已に崩れんとしたりたり。義貞数萬の軍士を卒へ。備を堅めて責鼓を打南方討たせ者ども下知せられれば。義貞の先陣大館宗氏兵を前に馬を進め。長崎が勢を追取込追たり物と責戦ふ。長崎高重も百戦の命を此一挙に捨千騎が一騎に成迄も互に引じと攻合られども。味方は更に續く義勢

うく敵へ追々こ馳集て大勢うれば迚も可叶とも思はざりうれば勇と震ふて一方を打破り手勢を引具し軍を不乱退し程こ丸多く討とて分倍指てぞ敢ひうる義貞の大軍続て其跡を攻んと進こうるが加地源太左ヱ門数千騎こて要害を前こ當て防ぎうる間源氏の勢却て追崩さるく扨止め義貞猶続て分倍へ寄んと思れけもぐも連日数度の戦ひこ数多の人馬疲まうしこ久米河こ陣を移し一夜馬の足を休め明る且を待うるる

義貞敗退堀金

義勝曳黨加新田陣

去程こ桜田治ア大輔加治長嵜等十二日の軍こ打負て引退き由無倉へ向へうれば相模入道大こ恕り憎き新田が行跡哉こそ思舎弟四郎左近太夫入道慧性を大手の大将軍こして臨田陸奥道道祐城越後守貞冨長崎駿河守時光安藤左衛門尉高貞藤左ヱ門入道横溝五郎入道新開左ヱ門入道南部孫次郎某三浦治部五郎氏明を差副て重て十萬余騎を指きを十五日の夜半刻こ分倍こ着うれば當陣の敗軍又力を得て勇こ進まどうる者多し。時こ横溝南部の二人進こ出て申様義貞此程の軍こ打勝て心誇こ油断こそ候らんぞ今宵一夜討こうるべと申うれども。大将慧性別こ謀ありとてこれを不用義貞も無倉勢恐ろこ足ぞこ思ふうる。敵の陣へ忍の兵とも不入故こ夜の内こ敵こ荒手の大勢加こうるこ不知こそ。十五日の夜未明こ分倍へ押寄て鬨を作る。無倉勢へ待設うる事うれば敵を迫こと呼引寄寃竟の射手三千人を勝て面こ進め雨の降加く散々こ射うるれば源氏思ひもよらぬ射こうるまこて進むも不契退くも危うれば四途路こ成て立こうる處を。平家是こ利を得て陣門を弧こ開十四五萬騎の勢を

幾手ふも分つて皆鋒を双へて切て出義貞の勢を中に取籠余さじとて責ろろ義貞の兵鎌倉の荒手に切ちられ右往左往に散乱を義貞も一生懸命の軍うろと被思られべ逞兵を引て緩る敵の大勢を懸破てを裏へ通り取て返して表へ懸技喚ひて懸入叫て懸出宛も電光の如激蜘手輪違に七八度づ程当り申されるとども元ろ敵に大勢の荒手加ろ先度の恥を雪めむと義を専ろて闘ひろる間義貞遂に打負て其勢若干被討て痛手を負者数を志べ散々に成て堀金を指て引退く鎌倉の大軍其日続て攻寄ろべ義貞外に助けの勢ろれば爰にて被討申さるべきを一戦の勝に誇て今は何程の事ろ可有新田を定て武蔵上野の者共ぶて出さんげんと大様に憑て時日を移を是平氏九代の運命ろ焉に尽めろ證とぞ覚えろる義貞は漸く堀金に陣取ろ

ども残兵僅にして再び戦の義勢もなく謀尽て無為方ぞ坐ろる。爰に三浦平六左衛門義勝と云者あり。三浦義村の庶流にして代々大多和郷を領ず。義勝の父義縁の世に当て喜古塲久野谷の三郷を加増を。然ろに今義勝の代に至て久野谷の二郷は金沢殿の舊領にて没収せろる。義勝深く此事を恨み寄々松田河村土肥土屋本間渋谷の輩高時及び奉行頭人に恨を含むを知て是を語ひ新田の御方ふを せんと思ひ立ろる處に今新田分信の合戦に打負て再戦の義勢うと聞へられべ急ぎ松田河村本間等の徒黨を集て此事如何と評定に本間右馬助申様今新田已に利を失ひて後迎も我等ぞ少勢を以て馳加ろるも如何ふも叶ひ侍ろまじ一旦に鎌倉より催促有て我を彼召寄上へ理を曲て鎌倉へ参ろべきうとありられべ土肥孫次郎深く思慮をめぐらして申ろる今新田敗軍の後我々鎌倉へ参りられば

義貞速ふ
鎌倉を
平定まる図

と長寿を始として宗徒の奉行頭人うんど豈忠とせんや。加之其以前より奉行頭人我等を善とせざる。若隠謀を企しうど事発覚せば謀叛人と号せらるべ。之罪に被行て汚名を末世に残さんを口惜うぞや。所詮新田が義戦に子細を軍門に曝しうぶ。勇名後代に無隠義を守さう待うと人口に残さうべ。若軍利あらば家門栄ん事何の疑ひうあん。唯一助に思ひ切て新田が今日の敗軍を助くべきと伸られば。三浦義勝此義最被謂さう各如何と申られば皆一同に此事に役ふ。去だ程を巡らして新田に党とべし。今義貞堀金に在て敗軍と集無さるよし此所へ鎌倉勢続て推寄さば。一定義貞亡ぶべ。是一大事の謀とて。三浦義勝分倍の陣へ使者を立て某等先頃より早速に馳参べくい処。常州の佐竹新田に子。千葉を相かくひ舟にて某が領地へ押渡り。新田と一手ふうんと企いう。其聞へあり。今彼等が未渡らぬ已前に。新田の一類を討平け義貞が首を捧げて其御地へ可参と加様の時へ何方が敵の出来侍らんも難計候へば其御勢余り鎌倉遠取へ御陣不可然と申ば大将尤迂大丈夫入道を始め諸将軍卒喜び勇て即使者を引出物を遣し義勝が謀最由々敷侍る上へ当陣敢て無左右不可進義勝早新田を亡し陣頭に可参恩賞頗る可重との返答あり使者帰来て鎌倉勢が陣取の様子又は将奢て軍卒怠り遊女を集め酒を愛し碁雙六を楽て新田退治の沙汰更に露計りもうきはを申られば義勝を始宗徒の者共扨は軍に勝にけりと喜び三浦河村土肥土屋松田本間波谷の輩其勢都合六千余騎夜をあらて新田の陣へ馳参る義貞不斜悦急ぎ対面有て礼を厚し席を近付て合戦の意見をぞ被訪る三浦平六左衛門義勝畏て申られば今天下二つに分て互の安否を合戦の勝負に懸る事にて候得ば其雌雄勝敗十度

も二十度もうづろ無てハ候べき。豈戦ふ度毎ゝ勝べき利あるんや。但し始終の落居ハ天命の帰する處ゆてゆゑ。遂ゝ太平を可致事何の疑ひ候べき。御勢ゝ義勝宗徒の勢と并せて戦んゝ是も猶敵の勢ゝ不及とゝ。今度の合戦是非一勝利得ぎんあるべくゝと伸られば義貞ゝ我も心ハ矢猛ゝ雄ど。當手の疲まゝる兵を以て大敵の勇徒ゝ懸らん事如何と被申ゝれば。義勝重て申ゝるハ。明日の軍ゝハ治定勝べき潤のひ其故ハ昔秦楚の戦ゝ。楚の武信君項梁頻りゝ秦の軍を破ゝ。心驕り軍懈て秦の兵恐ゝ不足と思へり。楚の副将宗義之を諫て曰。戦勝て将驕り卒惰る時ハ必破ると云。心を用ひぎんあるべくゝと。武信君さゝ弗聴果して後の軍ゝ武信君秦の大将軍章邯が為ゝ被討戦小亡ゝゝ。義勝昨日潤ゝ人を遣して敵の陣を見せ。其将驕る事ゝ支武信君ゝ不異是則ち宋義が潤ゝ所ゝ不違。所詮明日の御合戦義勝荒手ゝ候得ハ。一方の前陣を兼て敵を一當ゝて見ひらんと申れハ義貞誠ゝ心服ゝ。今度の軍の成敗を三浦平六左エ門ゝて被行ける

義勝謀破鎌倉勢　安保横溝救慧性

去程ゝ三浦義勝其宵分倍の陣へ人を遣ゝ。今夜堀金ゝ押寄輙義貞が首を討取て。義助ハ未知行方。跡より追々ゝ御左右申侍らんと注進ゝれば。大将を始兵共ゝる日出度事や可候ゝて。皆萬歳を呼て其夜も遊女を集め酒宴を成てそ楽みける。明ぬ。五月十六日の寅刻ゝ三浦河村土肥土屋松田渋谷本間江戸豊島葛西河越等其勢六千余騎真前ゝ進んで分倍河原へ押寄る。敵の陣近く成まで熊と旗の手とも不下時の声とも不挙ゝ。是ハ敵ゝ出抜て手攻の勝負ゝ為決ゝ。如実敵ハ前日數ヶ度の戦ひゝ疲き其上今敵可寄ゝとも不思懸ゝれハ雪小鞍とも不置物具とも不取調。或ハ遊君と抱き双べて卧ゝる者あり。あるハ

酒宴に酔を被催て前後も不知寝るもあり。只一業所感の者共が招自滅に不異。三浦が勢の次第に相近付を見て。河原面に陣を取たる者より只今旗を巻て大勢の間に馬を打て来る者あり。若敵にや候らん。即要心ひへと告らるれども。大将を始て去事あり。三浦大多和が相模勢を催ふ。義貞を討取て由方へ馳参らと聞へ。一定参りさらと覚ゆるぞ。懸る目出度事こそなれと驚者一人も迄是唯兎も角も運命の尽ぬる程こそ浅間しけれ。夜未明廑に三浦義勝相印相言を定て。大将の陣近々と押寄時の声を揚らるれば。鎌倉勢の陣中大に周章度を失ふて迷ふ廑へ。新田義貞一萬六千余騎を四手に分義勝が跡に続て三方より間を作て乱を入。大将慧性が物具をもせず太刀計取て立出られた。良役等早く由遁をひへて。急成車にて鞍置隙もなられば。繋ぎる馬の鼻綱を切てあらひ轡をもろて引

来り抱き乗て鎌倉を指て落て行。去程に三浦が宗徒の勢土肥土屋を始。江戸豊島葛西河越坂東の八平氏武蔵の七党を七手に分て蜘手輪逢十文字に懸寄ぬ。義貞義助其外新田の十六党力を合て縦横無尽に切崩しられば。鎌倉の者共大勢くとの。三浦が一時の計に被砕紛る者数を不知散々に成て落て行。新田三浦一手に成て追まぐる余さじとの。跡を附られば大将左近大夫入道も関戸の辺にて土肥孫次郎に行前を塞ぎ後より新田三浦の勢に取込られ已に通るべき様も多く見へ々と。横溝八郎前に進。恵性爰を由通りあるべ先陣へ横溝八郎二百余騎にて打也。我と思ん者へ寄せ合て手並の程を見よと呼て百五十騎を一手にして。敵を左右へ懸ちし。一條の血路を開さて慧性を落進らせ自跡に踏止て近付敵二十三騎射落し。矢尽くるまで懸合く責戦ひ主従二騎に成られば今は是迄くとて良等北畠次郎に向ひ汝を入

道殿に馳付参せ〻某爰にて討死せむ〻敵鎌倉まで跡を追候べ〻故ホ
百余人の者共に御大事に替て討死仕れ〻必ず北死仕り〻ハ
あ〻ぶ〻と申候へとありしかば。北畠御館に入て今の御大事を見捨何
で御使に可参。御情なふこそ〻と申ける。横溝声をあ〻げ。呼已和殿の
一命を助度思ふまあ〻ぶ。此事を入道殿に申入むとんハ我忠義間夜の錦
をぞ侍らん不参で今生後生不忠の者と呵まれ。左あ〻ば参て申
べ〻罷帰りに迫る〻ぶ被討させ給ふべ〻。御死骸を抱きて自害仕
べきこそ。入道殿の跡を追奉て斯と申入れば。慧性泪を流して落行
まるを。御返事如何と声を掛られば。汝ハ入道に供奉せよ〻と能申る
に。北畠頭を打振。八郎殿と同條に可死約定のひと申。慧性いとゞ泪を
まして忠節言語に余りと申せとあり。北畠次郎兼て走り返り
潮に成て敵の中を切抜く。主の討死の傍を尋るに。月ありとはいへども夜中

ふて主の死骸分明なざりしかば。兎ある岩の狭間にて夜を明し。終に主の
死骸に尋ね当りられば。指を噛きり血を以て傍の石に事の意を書記し
其後自害してこそ失さりける。又安保入道道堪ハ慧性が家の子にてあり
ぶ。関戸辺まで引さりける間に主の慧性を見失ひられば。嬶子弥五郎父
に向ひ。入道殿ハ如何なるせうひらん無覚束存じ〻ぐ。自是引帰し〻御行末
可兼て〻ハ父ハ急ぎ鎌倉へ御引ぬと申られば。道堪泪を浮へ嬶敷も申
者かな。我も左ハ思ひつまぐ。我若引帰さば和殿も共に引帰さん事を悲
く思ひ〻爰まで来つるぞ。父祖の家を継を以て忠孝の道〻と云本
文も侍まぐ。和殿ハ急ぎ鎌倉に帰り。後日の合戦に忠を尽さる〻候。某ハ
入道殿の御行末何地迄も見届け可申〻とあり〻られば。弥五郎大に歎き。
扨ハ某故に是迄落延るひさうとや。御志最難有ハ然〻なれ〻。弓取の
可死所ふく死せずして誰に面を可向候哉夫而已なれば安保の某こそ稽

命を生さうまんと被謂候さんゐ先祖の名を汚し恥を子孫に残さ有
まう是父の慈に似て却て大きなる讐なりつさせうと父子一所に戸を曝
て名を後代に止め侍らんと申ろうそ道堪いとく泪よくまて暫に物を
も不謂良有て目を推掛ひ人の親の子を思ふ間に迷ふとゝ是うあり
但し御辺ハ父ふら勝まて生まるゝとて覚ゆきあつ〳〵勇士を世ふ
もあるまて只今失ゝむ変こて悲ゝ去父子二騎返しられゝて何
程の変ら仕出さゝ先此方へ来まやとて小高き所に旗打立て落行勢
を擾り止入道殿の御幼聞もいまゝ不知に汚まくも落らまひとゝ鎌
倉に帰て相州の御前にて何とゝ可申間そ安保入道父子是にあり我
と思ゝむ弓取ハ変に踏止まりて大将の御幼聞を彼所ひて討ゝられハ
安保ら良役の外に心あら輩落出つゝ三百騎計に成ゝらゝ此勢を以て
此所にてや待ん返してや見んと思ふ所に入道百騎計に討ゝられ追来ら
敵に取て返し取く返し自戦ふて来らまゝれハ安保嬉気に打見て扨ら
いまゝ被討ゝらハざらゝらゝて三百騎を一手に喚て敵の大勢を懸隔ゝ
戦ふく闘死を遂ゝらゝる其外慧性ら危きゝ替り返し合て討死を遂
ゝる者藤沢兵聞次郎浦賀権之助横山八郎品茅九郎鶴王にて十六
に成ゝる童等まり是等ら闘死の間に慧性ハ其身無恙山内まて引
きゝる此入道年頃良役に情深く行跡被申ゝるに依て言報恩の
者をも加様に命に替りゝるこそ聞へ此時長茅次郎高重ハ落ゆく
味方を助け跡に引下て退きゝるゝ鎌倉への家産ありとて久米河まて
組て討ゝる敵の首二ツ切落ゝる敵の首十三中間下部に取持せく鎧
に三所の創も未抜疵の口より流ゝる血に白絲ら鎧忽ちに火威に
染成て閑々と鎌倉殿の御屋形へ参り中門に畏りゝれハ祖父の圓
喜入道世にも嘻に気に打見て出迎自疵を吸血を含て泪を浮て申けゝ

古諺に見子不如父と申候得ども。我汝を以て上の御用に難立者と思ひ常に不孝を加へ度大なる誤に仕今萬死を出て一生に遇臂の力を以て堅を摧きなる振舞古の項羽樊噲も為難度を究め得さるとなつべし。相構て今より後も我一大事と合戰して父祖の名を呈し守殿の御恩を報し申べし。日頃の庭訓を翻して只今の武勇を感じられば高重頭を地に付て落涙ぞ及びける。斯度に西六波羅役落して時益苦集滅道を添矢の為に亡び。仲時一族役臣江州番馬にて悉く自害の由告来りられば。殿中の満座色を変じ只今眼前に大敵蜂起して憂とうん所に。又ひ如斯大変何に譬を可取様なく。壮を果さる計なり。西六波羅に附役ひ輩の一類眷属是を聞て声を放て泣悲む有様何に武く勇める人々も足手も痿る心地して。更に前後を不辨去ぬそ此侭可済事なく絵で。先眼前の大敵と退け。其後京都の沙汰に可及ありとて当手の軍評定をこそせられける。京都の変を敵に志られ臣と思はれるまでも。陳あるべき事なく後に聽て義貞の陣中へ聞て。哀れと方の涙色やに勇まぬ者はなかりける

義貞大軍乱入鎌倉　本間山城折大舘兵

去程に義貞入間河より関戸に至て。數ケ度の戰ひに勝彼申也と聞へられば。東八ケ国の軍勢馳集る事春山に雲霞の蹙に如く。秋風の千草を靡かるに異ならず。関戸に一日逗留あつて軍兵の着到を書されけるに。六十萬七千余騎とぞ聞へける。此に至て兵を三手に分て各二人の大将を差副て三軍の帥を令司其一方には大舘次郎宗氏を左将軍と。江田三郎行義を右将軍と。其勢總て九千余騎極楽寺の切通へ向らるる。又一方には堀口三郎貞満を上将軍と大島讃岐守盛之を裨将軍と。其勢一萬一千騎巨福呂坂へ差向らる。又一方には新田義貞

同義助諸将の命を司て。山名岩松里見大井田額田鳥山桃井田中
良田井羽川已下の一族を前後左右に為て。其勢五萬七千余騎
粧坂より被寄る。鎌倉中の人々昨日一昨日まぞも分倍関戸に合戦
有て味方打負ぬと聞へしかども。猶物の數とも不思敵の分際なしと有
やと侮て強に周章さる気色もなかりけり。大手の大将に被向る四郎
左近大夫入道僅に被討成て。昨日の晩景に山内へ引返されぬ。又搦手の
大将にて下河辺へ被向さる。金沢武蔵守貞将も小山判官千葉介の
両将に打負て下道より鎌倉へ引返し被申ければ。以の外の珍事にて
人皆恐怖を懐きけり。扨に結句五月十八日の夕刻に村岡藤沢片瀬腰
越十間坂五十余ケ所に火をそ。三方より寄懸さるべ。鎌倉中の
強勇不斜武士東西に馳違。貴賤山野に迷ふ。是ぞ蜂火萬里の狼煙
の後に戎翟の旌旗天を掠て到り。霓裳一曲の声の中に渙陽の鼙鼓
動地来りぬ。周幽王の滅亡せし有様。唐玄宗順療せし為體も。角こそ有
つらんと被思知れて浅猿しく共も。去ば義貞の勢三方より
寄と聞へければ。鶴倉に三手に分てぞ防ぎける。其一方には金沢越後左
近太夫将監に。安房上總下野の勢五千余騎にて假粧坂を堅めさせ。一方
には大佛陸奥守貞直を大将として甲斐信濃伊豆駿河の勢を相從へ七
千余騎極楽寺の切通を固めさせ又一方には赤橋前相模守盛時を大
将として。武蔵相模出羽奥州の勢八千余騎にて洲崎の敵に差向らる。又
相模左馬助高成城戎左大夫将監時守を大将として
其外末々の平氏八十餘人。国々の兵五萬余騎を忠弱うして方々に向そ
鎌倉中に被殘さる。三方の合戦同日已刻より始て。終日終夜責戦ふ。
寄手は大勢なれども悪手を入替々々責給ければ。鎌倉方には防塁紀所
にうろへ出て。去ば三方に作る時の声両陣に喚

翁丹は天を響し地を動す。奥鱗に懸り鶴戒に開て。前後に當り左右を支へ義を重ず命を軽し。安否を一時に定め剛臆を累代に可残合戦うれば。子彼討とるべし。親は乗越て前なる敵に当る。主射落さるゝと雖不扶して良等は其馬に乗て懸出或は引組て勝負を成もあり又は打替て共に死さるもあり。其猛卒の撰を見るに。萬人死して一人残り。百陣破まて一陣に成ぬ。可終軍とは見へさりけり。爰に赤橋相摸守盛時は早天に巨福呂坂より向ふる。堀口三郎貞満大島瀧岐守盛之が勢と洲崎にて被戦ける。此陣の軍剛にして一日一夜の其間に六十五度を懸合ける。去は數千騎の良従次第に被討追々に落ること程に。残る所五百余騎に成ぬ。猶此勢にて戦ひなば可被防と。盛時如何思慮せるにか。同陣に侍大将に有る。南条左エ門高直に向て被申ける。楚漢八年の戦ひに項羽度毎に討勝れども。遂に垓下の一戦に討負て亡びぬ。晉七十度の戦ひ重耳更に勝利を得る事ありしが。最期瘴境の戦ひに打勝て文公霸業を保つ。去べ萬死を出て一生を得百度負て一戦に利あるは戦場の習ひなり。今此所の軍敵聊に勝に乗て似ざるべし。去が迎當家の運今日に窮りぬるは不覚雖然盛時に於ては一門の安否を見果るとも。此陣頭にて腹を切んと思ふ。其故は盛時足利に縁を曳ける間定て此度高氏の叛逆盛時兼てあらつらんと。相州殿を始一門の人々に後指を被差ける事無念骨に徹せり。上や自害して盛時が赤心を入道殿の見参に入むと兼てあるべし。彼田廣は燕丹に被培て時此大事を漏しうふと被謂て。其疑を散ぜん為燕丹の前に自殺して失さりき。此陣闘急にして兵皆疲まさる。我何の面目有て堅めさる陣を引退き。而も嫌疑の中に列つて無甲斐命を可惜とて。戦いまだ半なる頃帷幕の中に物具脱捨腹十文字に

掻切て北枕にぞ臥させける。南条宗直是を見て大将已に御自害
ある上は従率誰が為に命を惜で去ば御供申んとて続て腹を切り
られぬ。同志の侍九十余人腹を切て上に重り伏扨こそ十八日の
晩程に洲崎の坐一番に破ぬ。堀口大膳の軍勢は山内まで入に けり。
粤に本間山城左衛門は多年大佛陸奥守貞直の恩顧の者にて殊更
近習しける。聊か勘気を蒙て不被免出仕未已が宿所にぞ候ひける。
既に十八日洲崎破ぬ。十九日早旦極楽寺の切通の坐めも危ふしと
聞へしまだ。本間大に驚き急ぎ若党中間三百余人是を最期と出
立て。極楽寺坂へ馳向ひしに未軍最中なりしかば大に喜び扨は此
手いまだ破ぬざりしとて。不慮敵の後より喚て懸入勇戦る大
勢を切まくり。遂に大将大館宗氏に組むと馳合る。是を見
て大佛貞直も木戸を開て懸出られば大館が三千五百余騎前後に
敵を受て防ぎ戦を失ひ。須臾の程に分々に靡き腰越までぞ引退ける。
本間が五余り手繁く追懸られば。大将宗氏御方を安く引さんと只
一騎取て返しても追靡け。追返し思ふ程戦ふて。遂に本間が良等ふ組
合て刺違へてぞ死にける。本間大に喜び馬より下て宗氏が首を取て
鋒に貫き。貞直が陣に馳参り幕の前に畏て申けるは。多年の奉公
多日の御恩此一戦を以て奉報ひ今御不審の身にて此侘空く相成
ひぬ。後世迄の志念共成ぬべふ。今は御免を蒙て心安く冥途の御先
仕ばやと申も不果涙を押へて腹掻切てぞ失にける。是を見て
大佛貞直三軍可奪帰とは是等をやいふべき。以徳報怨とは彼が事を
や申べき。恥じの本間が心中哉とて落る涙を袖に懸るぞいざや本間
が志を感じ。我もとみぐ敷一軍せんとて打出被申られば。相従ふ兵も
泪を流さぬ者ぞなき

義貞稲村崎退潮　為基大戰由井濱

去べ大館宗氏討死して其勢片瀬腰越を引退きぬると。江田行義早馬を以て大將義貞の方へ注進す。及びぬれば。義貞聞も不敢逞兵一萬余騎を率。サ一日の夜半計り片瀬腰越を打廻り。極楽寺坂へ打懸明行月ふ歇の陣を伺ひ被申ぬれば北へ切通まで山高く路嶮しき木戸を誘へ垣楯を搥て。數萬の兵陣を双べて並居たり。南へ稲村崎より沙頭路絶きて。浪打涯まで逆木を繫く引懸て海四五町ゞ程り大船數艘並べて。失倉を搥上横矢を射むとぞ構へたり。實も此陣の寄手叶とぞ引さるんも理と見へたれど。義貞馬より下て甲を脱海上を遥伏拜龍神に祈誓して被申ぬるは。傳義る日本開闢の主伊勢天照皇太神の本地と大日の尊容に顕ると。吾君其苗裔にて逆臣の為に西海の浪に漂ひぬる。義貞今臣たるの道を尽さむ為に斧鉞を把て敵陣に臨む。其志偏に王化を資奉り蒼生を今安と思ふ。仰願は内海外海の龍神八部臣ゞ忠義を鑒て潮を万里の外に退け。道を三軍の陣に今開ると。至心に祈念し自佩被申ぬる黄金作りの太刀を把て。海中へ投入被申ぬれば。義貞ゞ誠心龍神納受ぬるひぬる。又は高時の運命爰に尽めるる故にや有ぬん。其夜月の入方に前々更に千事もうぬる。稲村崎俄に廿四町遠干潟と成て平沙渺々たり。横矢を射むと構める數百の兵船も落行汐に被誘て遥の沖に漂ひぬる。義貞此不思議を見ぬひ。傳聞漢の貳師將軍李廣は城中に水尽渇に被責ぬる時刀を拔て岩石を刺まぬに飛泉俄に涌出ぬ。我朝の神功皇后も三韓を征しぬひ時。自干珠を取て海上に擲ぬひ。潮水遠く退て終に勝利を得ぬ。是皆和漢の佳例にして古今の奇瑞に相似たり。進めや者共と被下知ぬれば。江田

義貞龍神ヲ祈誓シテ海潮ト退ク図

大館山名岩松里見大井田額田鳥山桃井田中世良田一井羽川の人々を始し。義貞の從臣船田長濱由良名張瓜生篠塚畑亘理蘆梅林等一騎當千の輩。其外越後上野武藏相模の宗徒の軍勢六万余騎一手に成て。稲村崎の遠干潟を真一文字に懸通て。鎌倉中へ乱入。依之防禦の兵後ろを敵と欲防だ。前ろを寄手跡に付て攻入らんとす。前ろを敵に懸合むとすれば。後の大勢道を塞て欲討れば爲に進退失度東西に心迷ひて。墓なき軍も得せざれば八方に散乱す。爰に島津四郎と申し大力の聞へあつて。誠に畚量骨柄人に勝れたれば。即大事に逢めぐる者とて。執事長崎四郎入道烏帽子子にして一人當千と被憑されたり。詮度の合戦にこそ向ふべきなれども。口々の防に不被向。態と相摸入道殿の屋形の辺りにぞ被置ける。懸る處に濱の手破れて。源氏已に若宮小路まで攻入らんと騒ぎたれば。相摸入道彼島津を呼寄て自酌を取て酒を進め。三度傾けける時三間の馬屋に被立さうろう。関東無双の名馬白浪と云ふに白鞍置て被引ける。見人是を不羨と云事なし。則ち濱手の防を被命けるに。島津畏て門前より此馬に打乗。由井濱の浦風に靡く大笠符を吹そへさせ。三ツ物四ツ物取著てあらうと拂ふて馳向ひければ。數千の軍勢是を見て誠に猛當千の兵也。此間執事の重恩を受て。傍若無人の振舞をするこそ理り哉と思はぬ人はなかりけれ。義貞の兵是を見て連を敵やと訶りければ。栗生篠塚畑亘矢部堀口蘆梅林等大力の覚取たる荒者共皆我先に彼武者と組て勝負を決んと馬を進めて相近づく。双方名誉の大力共げに人交もせざる軍をするぞかしあれ見よと爽て。敵味方諸共に難唾を呑汗を流し是を見物してぞ扣へける。島津四郎少しもたじろぐ気色もなく。敵陣間近く成るふ。

甲を脱で馬より飛下り。閑々と身繕をする程に。何ともろぞそと見居られど。ちめくと降参して。義貞の勢にぞ加はりける。貴賤上下是を見て口と明てあされて。誉る言を翻して悪まぬ者は無りける。これを降人の始とて。或は年頃重恩の郎従或は累代奉公の家人ども。主を弃て降参し。親に背て敵に付は目も不被当有様なり。凡源平威を振ひ互に天下を争さん事も。今日を限りとぞ見へさりける。去程に濱面の在家并稲瀬河の東西に火をとりけされは打節濱風烈く吹布て車輪の如くなる炎黒烟の中に飛散て。十町廿町ゞ外に燃付事同時に廿餘ケ所に猛火の下より源氏の兵乱入て度方を失ふ鎌倉勢と。此彼に射伏切伏或は引組差違或は生捕頸と取分捕高名様々なり。煙に迷へる女童部女房達被追立て火の中堀の底にも不云逃例きなる有様は是や此帝釈宮の戦ひ。修羅の眷属天帝の為に被罰て劔戟の上に倒れ伏て苦むゞ如く。又阿鼻大城の罪人獄卒の鞭に被駆て鉄湯の底に落入覧も角やと被知て。語に言ちく聞に哀れを催して皆泪にぞ咽びける。去は餘烟四方より吹来て。相州の屋形近く火懸りられど。相摸入道妻妾一類と引具し。千余騎にて葛西ゞ谷に引籠り被申られど。諸大将の軍勢は東勝寺の内外に充満たり。是は祖父代々の墳墓の地なれば。若事不契に於ては兵共に防矢射させ。心閑に自害をゞさ其覚悟とぞ聞へける。麦に長崎三郎左衛門思元円勘解由左衛門為基二人は極楽寺の切通に向て。責入敵を支へて在る。敵の鬨の声已に小町口に聞へて。鎌倉殿の御屋形に火かけると見へ。相随へ七千余騎と本の防口に残し置父子二人ゞ手勢六百余騎を勝て小町口へ馳向ふ。源氏の勢是と見て其小勢なりと慢り。大勢の中へ取籠で討んとぞ。長崎父子少しも不試奥雛に連つれて懸破り

虎韜と列まてゝ追靡け。七八度ぐ程ぞ揉ざりくれば。源氏の軍勢吹の子と散をぐ如く懸崩され。若宮小路へ颯と引て暫く人馬の息をぞ継せける。懸る處に天拘堂と扇ヶ谷と軍あると覚へて。馬煙影敷見へければ長崎思元円為基父子左右へ別まて馳向へて。父思元為基と申様我自是守殿の御供せんと思ふ。汝ハ如何に生ざらんと時至ると見るるるべ公達を取立参らせと懇に云捨て東勝寺へ引んとて為基是を限りと思ひれば。名残惜気に父の方を遥に見遣て。両眼より泪と浮へて立ざりける。父此と是を見て何ら未練に名残の可惜我今申渡せ事若不成時ハ汝迚も生残るべきにあらず。再會期も久かるべ冥途にて寄合むとるべ。何ら左さに悲しるべきとあらざり申られば。為基泪を推拭ひ左ゆゞ疾にて冥途の旅を御急ぎあれ。死出の山路にて御待候へ。頓て追付進せ候へむと申棄て。大勢の敵の中へ懸入る。心の中にて哀なる。飽まぐ戦ふて相従ふ兵僅に二十余騎に成ぬを。敵三千余騎の真中に取籠て短兵急に捨むとて。為基ぞ佩る太刀ハ面影と名付て来太郎國行ぞ百日精進して百貫にて二尺三寸に打る太刀なれば。此鋒に廻る者或ハ甲の鉢を立破に被破。或ハ胴板を袈裟に切て被落ける程に。源氏の軍勢是に辟易して敢て近づく者もなく。只陣を隔て矢衾を作て遠矢に射殺さんとしける間。為基ぞ乗る馬に矢の立事七筋に角て可然敵に近寄て組んと為る事叶ぬぞと思ひれば。由井濱の大鳥井の前にて馬よりひらと飛で下り。只一人太刀を倒に杖て二王立にぞ立なる。源氏の兵是を見て猶十方より遠矢に射る。計にて寄合せんとする者ぞなる。敵を為謀に千員なる真似をして小膝を折てぞ跳なる。爰に足利尊氏の子息千壽王殿を。紀五左衛門引具し。五十余騎にて

ひしゝと打寄て。勘解由左衛門為基が首を取んと爭ひ近付る處に。為基がゝと起て太刀を取直し。何者ぞ人の軍を仕舞ひて休ひ居るを考へずんぞ已等がゝ〳〵る頸取せんと云侘に。鐔本まで血に成る太刀を打振て。鳴雷の落懸る如くに大手をさゝけて追廻りゝれば。五十余騎の者共逸足を出して逃さるゝ。為基大音揚て何国まで逃るゝ。蓬に及せと劒る声の只耳本に聞へゝ。日頃は馬も早〳〵おもひ馬の皆一所に躍る心地して恐しうむど云計る。為基五十余騎の中へ懸入て裏へぬけ取て返して懸乱し。命を限りに戦ひゝるが。又廿一日の合戦にも由井が濱にて大勢を東西南北に懸ちし。敵味方の目を驚し。其後生死をあらそ成に成ゝ

鎌倉諸将闘死責口　聖秀守節死義

此時大佛陸奥守貞直は昨日まで七千余騎にて極楽寺の切通を支て防ぎ戦被申ゝる。今朝濱の合戦に三百余騎に対成て。剰へ敵に後を被遮て。前後に度を失ふ。御坐る處に。鎌倉殿の御屋形も火かゝりぬと見へしぬ。世間今は扨ても思ひゝん。又主に自害をも勧けむ。宗徒の即従三十余人白洲の上に物具脱棄て腹をぞ切ゝる。貞直是を見て日本一の不覚の者の行跡かな。千騎が一騎に成までも敵を亡し。名を後代に残さんと勇士の本意とする所なれ。ぐ去た最期の一合戦快ふして兵の義を勧めんとて。被討残る二百余騎の兵を相従へ大島里見額田桃井等の六千余騎にて磬へる真中へ破て入思ふ計戦ふて。敵を打事数をあらぬ弛出て味方を見まゞ其勢六十余騎に成ゝる。貞直其兵を差招き。今は未しの敵と懸合事も無益とて。服屋義助が勢の雲霞の如くに扣へる真中へ駈通り。一人も不残討死して尸を戦場の土にぞ残しける。金沢武蔵守貞将も山内の合戦に

相従ふ兵八百余騎〻被打散我身も七ケ所まで疵を蒙りて。相摸入道の御坐を東勝寺へ引帰り被申〻れば。入道不斜感謝して聽て所探題職〻可被居御教書を被成相摸守〻ぞ被移る。負将〻一家の滅亡今日の中を不過と被思〻れども。多年の所望氏族の規摸とする職〻れば。今は冥途の思出〻もられ〻。彼御教書を清取〻まゝ戦場へうちつぐ申され〻ぶ。其御教書の裏〻乗我百年命報公一日恩と大文字〻書て。是を鎧の引合〻入て直〻馬〻打乗て。目〻余る大勢の中へ會釈もすゝ懸入終〻討死を被致る。當家も他家も推双べて感ぜぬ者はなし〻る。又普恩寺前相摸入道信忍は假粧坂へ被向しが。敵の大将は新田義貞兄弟〻て然も大勢なり。御方は無勢なり〻る故〻堅く守て不出合〻〻依て。結句諸方の口々よりも其破を遅なり〻る。諸方の攻口皆破まて敵谷々へ入乱ぬと聞へけれ。

普恩寺信忍夜晝五日の合戦なり此所をまのがれも今は甲斐なく成ぬとて。討残されなる郎従を随へ敵の乱入谷〻を切拔被申れたが。遂〻二十余騎こそ残りなる。今は早是迄とて既〻自害に及びなゝぶ子息越後守仲時六波羅を没落して。江州番馬にて腹切被申けゝる哀なりど思ひ出され哀まるや不堪なん一首の歌を御堂の柱〻血を以て書付被申なる

なゝ〻しの　ひとつの道に旅なれば　なほ後の世かな〻〻哀

年来嗜弄被申事〻〻。最後の今も不忘心中の愁緒を述て天下の称嘆〻残されなる。數寄の程こそ優〻なれ。諸方の攻口へ被向〻る宗徒の輩追〻〻自害〻被申なる中〻臨田陸奥入道道祐が子息民部大輔俊時父〻最期を勧むと。腹掻切て目前〻卧〻なるを父道祐是を見て。目られ魂消て落る泪も不留被打偏〻〻良久共主と共〻自

害せんとて二百余人並居うつと。防矢仕まつて三方へ差遣。狩野五郎
重光は年来の者なり上近く呂仕まつれば。吾腹切て後屋形に火をか
て敵に頸とらせすと云含めて一人留置先立めり子息の菩提と祈
我逆修にも備へむとや被思ん。子息の戸厳に向て年来誦被申ける
持経の紐を解要文慮々打上心閑に讀誦。已に五の巻の提婆品
てんと走る時狩野五郎門前に走り出四方を見る真似して走り入
防矢仕い者共早皆被討て敵責近付ては早く御自害ゆへと勧るま
ば入道さるべきて経を左の手に握り。右の手に刀を抜て腹十文字に
掻切て父子同じ枕をぞ臥ける。狩野五郎は年来と云重恩と
云。當時の遺言旁難遁ぬ。屋形に火をかけ腹をも切んずらんと
思ひ寄れば左はなくて主二人の鎧太刀刀剥取家中の財宝を聚め中間
下部に取持せて。圓覚寺の藏主寮にぞ隠居しける。此重宝共して

は一期不足あるべしと覚へしに。天罰にや懸りけん舟田入道長を同射
て押寄是非なく召捕て遂に首を刎て由井濱にて掛らるるに最も
角にて有らんずれとて悪まぬ者もなかりけり。臨終新左近入道聖遠
は最期に臨て。嫡子三郎左立門忠頼を呼今攻口悉く破る御一門連
大略腹切せつて入道も守殿に先座参せて其忠義を知らぬ奉んと
あるにふて去ぬ御辺は未私の眷養にて。公方の御恩を蒙り身をなれ
だ。從ひ今命を不弃とも人強ち義を知ぬ者とはよもあるまじ。何地に
も身を隠し後の大事を謀らるべし。夫も不相成事にはいづく出家遁世
の身となるべ。即一門の後世又我等が菩提をも弔ひ一身の生涯を心安
く被皆ゆへと泪の中に被申られだ忠頼も面眼に泪を浮へ暫くは物
も不被申ざりけり。良有て是にて仰とも覚へひつ孤忠頼直に公方の御
恩を不蒙のべども。一家の續命悉是武恩に非と云事なり。最忠頼自

幼少釈門に入り身をくゞ恩を弃て無為に入とも然るべき苟も弓矢の家に生れ名を此門業に委ねぐ武運の頽を見て時の雖を遁んぐ為に出塵の身と成て天下の人に指を差まい事是に過ざる恥辱やはべき又後の大事を謀ひ事も容易支にあらぐ若生ながらへて却て汚名を取もやはべき唯可死時に死もるべき武士の本意さるべき御腹被召ひわゞ冥途の御先仕ひたんと云も不終倫らに袖の下より刀を抜て腹に突立父の前に畏て縢も不崩死ざるる其帛の四郎是を見て続く腹を切んと志るゝを父入道これを止め暫く我を先立て順次の孝を立其後に自害せよと申れた四郎抜ざる刀を収て父の前に畏てそらひゝゝる入道快気に打笑ひ閑々と中門に曲彔をかざらせ其上に結跏趺坐し硯取寄筆と染自辞世の頌を書ざるる其頌に曰

提持吹毛　截断恵空　大火聚裏　一道清風

と筆を置き又手して頭を伸。四郎其討と下知しくれた。四郎大膚脱て後へ廻り父の頸を打落し。其太刀を取直して鐔本まで已ぐ腹ふ突貫て俯伏にぞ卧ざるる。郎等三人是を見て支寄て同ど太刀に被差貫て。串に指ざる魚肉の如く頭を連ねて伏ざるる。爰に安東左衛門入道聖秀と申せし。新田義貞の北臺の伯父に三千余騎にて稲瀬川へ向ひまいるる。其手の防ぎ厳重なりけるに。稲村嵜の破まよう。世良田太郎ぐ軍後へ廻て攻立ければ。前後の敵を支へ兼て屋形をさて引き焼ぐ。又由良長濵ぐ勢に取籠られて。百余人に被討成我身も数ヶ所の薄手を負て已ぐ宿所へ引帰れば。今朝巳の刻に宿所ハ灰燼と成て。妻子眷属ハ何地へ落行ぐむ行未も不知成て尋問ぐき人も迚。夫而已ちぐ鎌倉殿の御屋形も焼て。入道殿も東勝寺へ落させうひぬと申せ。扨ち御屋形の焼跡に一門傍輩何様腹切又ハ討死

等の様子も見めぐらし尋めぐらし。一人も不見候と答へ々。安東聖秀方
是を聞て口惜き事うゑ。日本の主鎌倉殿の年来住うし處を敵の
馬の蹄に懸させぐらん。其にて千人二千人討死をする人のうち事よ
と。後の人々に被嘲事こそ恥辱なれ。のざや人々迚も死せんずる命を
御屋形の焼跡にて心閑に自害て。鎌倉殿の御恥を洗ぐんとて。被討
残さる良等百餘騎を相順へて小町口へ打寄む。先々出仕の如く塔辻
にて馬より下。空しき焼跡を見廻せば。今朝まで差も華麗を尽せし
大厦高墻の構も忽ちに灰燼と成て。須臾に転変の煙を残し。昨日を
遊戯せし親類朋友も多く戦場に死て盛者必衰の理を餘せる悲
の中の悲に安東坐に泪を押へて惘然さる處に。新田殿の北臺の御使
にて薄様に書さる文を捧さう。何事ぞ〻と披見るに此程の鎌倉の
御有様今の扨とこそ羨り候へ。何に此方へ御出候へ。此程の武ぶ

身に替ても可申宥候。あど様〻に書さらう。安東是を見て大に色
を損じて申さるゝ。梅檀の林に入者は不染衣に自ら香しとこそ。
武士の女房さる者は健気さる心を一ツ持てこそ。其家も継子孫の
名を露を事なれ。されど漢の王陵が母は剣に伏して自殺し。其子王
陵を立て永く漢に仕へて楚に降る事を誠む。依之其身賢女の名を
残し。其子忠臣の名を失ぬ。我只今まで武恩に浴して人に被知
さる身の今事の急さるに臨で降人に出べき人豈恥を知さる者と
謂んや。去ば女性心にて彼ひ加様の事を被申とも。義貞勇士の義を知
ば可被制事なり。又義貞敵の志を奪ん為に斯謀ふべしと宣ふ共
北の方は我方様の名を失じと被存ひぐ堅く可被辞。唯似て友
とする世の習ひのうたてさ。子孫の為に不被憑と。一度は恨一度は怒て。
彼使の見る前にて。其文を刀に拳加へて腹掻切て失さらるゝ附従ふ良

等皆思ひくゝ腹切て同じく枕を倒さゝる

慧性詠死落奥州　　具龜壽盛高忍信州

去べ爰ゝ四郎左近太夫入道慧性の方へひかゝる。諏方左馬助入道
が子息四三郎盛高八數度の戰ひに良等い皆討まゐ。主従唯二騎に
成て左近太夫入道の宿所へ来て申ゝる。鎌倉中の合戦今夏迫
と覚へく候間御最期の御伴仕ひもむ為に参てい。早思召切せゝひ
候へと進められた。入道當りの人を遠ざけ潛に盛高が耳に被申ゝる。
此乱不量に出来て當家已に滅亡に及ぶ事更に他ち。唯相州
の御振舞人望に背き神慮に違ふ故ぇ。但し天假ひ當時の驕奢を
悪ミ盈ろを缺ん。數代積善の余慶に尽さゝ子孫の中絶ゝを
継痛れゝを奥と者豈ちゝんや。昔齊の襄公無道なりしかば其臣鮑
叔牙齊の死亡を見て。襄公の子小白を取て他國に走る。襄公果し
公孫無知が為に被亡て齊の國を失ふ。時に鮑叔牙小白を取立て
無知を誅し其國を復古せ。小白立て齊の桓公と号せ去八我に
於て深く存る子細あまた無左右自害せべからゝ。可遁八再び會稽
の恥を雪めがやと思ふ。御辺も能く遠慮を廻し何成方にも隠忍ぶ
べ。又八降人と成て命を全ふ。我甥亀寿を隠し置て時至りぬと見バ
旗を挙て素懐を可被遂。亀寿の事八五大院右卫門宗繁ホ
申含められバ心安く覚ゆなりと遠大の計を被伸ゝれバ。訪方盛高感
ト入て泪を押へて申様今迫八一身の安否を御一門の存亡に任せ候らひ
つるバ命を可惜事にあらざれば御前ふく自害仕て二心なき程を御
覧に入んと存じてそ甚を参てゆゝ。死を一時に定るハ易く洪を方
代に残せハ難しゝ申事候へば兎も角も仰に可随ひとて盛高御前
と罷立て相摸殿の妾二位の局の御坐る扇が谷へ参りれば局を始

進らせて女房達まで誠に嬢しげなりて扱も此世の中は何と成行ぐさぞや。我等は女なれば立隠るゝ方も有べき。此亀寿をば如何をぐき兄の万寿をば五大院右卫門可隠方有とて。今朝何方へやらん具し奉つる。たゞ心安く思ひ侍るゝ唯此亀寿が事ゆゑ煩ふて露の如くなる我身さへ消侘めるぞと泣口説のふ。盛高此事有の侭に申て御心をも慰め奉らばやと思ひられども。女性は無力者なれば若人に泄しのゝ支あるべ。大事の妨へと思ひ返して。泪の中に申ゝるゝ。此世の中今は扱とこそ覚へ。御一門大略御自害ゆゝ。大殿計こそ未だ葛西谷に御坐ゆへ。公達を一目御覧じゆて。御腹可被召と御い間。御迎の為に参ていと申られば今を嬉しき気に御坐つる。局の御気色ゆゝと成せるひ。万寿は五大院宗繁憚ふ申て預つるべ。世に頼母しく思へる夫に引ゝ和殿の心強さを何とせむ。此子をも能く隠し具とと申も不敢御泪に咽ばせ給ひ。盛高も流石に岩木ならねば。悲しさ遣方なけれども心弱くて叶じと思ひ萬寿御料をも五大院右卫門具して進らせ候つるとも。敵見付て追ふ〻進らせゆゝしくるべ。小町口の在家に支へて若君を刺殺し。我身も腹切て焼死ゆゝ。あの若君も今日此世の御名残是を限と思召。迚も隠れ有間敷夏にて少べ。狩場の雉の草隠なる有様にて。敵に探し出されて幼き御尸に一家の御名を失はん夏口惜候。夫よりゆゝ大殿の御手に被召冥途迚も御伴申させうひとゝこそ。生々世々の忠孝にて御坐ゆゝ。疾く渡し進らせうと勧められ。御局を始まゝ御乳人女房達に至るまで。こゝその事を根申しゝ歎せめて敵の手に懸りしゝ閉。万寿が事は如何せん愛憐へ。今日迚存まゝせつる人々の手に懸て。失ひ奉らんを見聞こゝ如何斗とゝ思ひ遣事もちきれ。唯我を殺して其後何ゝ計へとて。少人の前

後ゝ取付て声も不惜泣悲こゝ。盛高も目くれ心も消くゝ成る共
思ひ切でい果べうくゝ有ひ。声とあらげ色を損ドて申様武士の
家ゝ生れ一人襁の中より懸る事可有と思召まぬこそ薄情なれ。六
殿の左くゝて待給ふ。早御渡しゆて守殿の御供申させ給へ。と
侭ゝ。走り懸て亀寿殿を無是非抱き取て。鎧の上ゝ舁負て門より外
へ走り出まば。門音ゝろと泣つれる声の。遥の外所まで聞へて耳の底ホ
止また。盛高も流石ゝ足の進ぬて立止て見ゝまば。引残され人々も門
内ゝ見送りて泣叫ふ中ふも御乳母の御妻と申る人。歩既ゝ人
目も不憚走り出て。四五町ゞ程泣てハ倒れ倒まてハ起跡ゝ付て被追る
と。盛高心強く行方を知ぬと。馬ゝ鞭して打程ゝ後影も不見成けに
まば御妻今ハ維を育維を憑ゝ可存命ぞやとて。辺りなる古井ゝ身を
投て終ゝ空くゝ成被申ける其後盛高此若君を具足して信濃へ落下り。

諏方の祝と憑で隠ま居くゝる。建武の乱の春ゝ皆く関東と却略
再び天下逆乱の基と起しける中。前代の大将相摸次郎と申る此亀
壽丸ぶ事うゝ斯て左近大夫入道慧性ハ二人の姪ハ心安く落しぬ。
今ハおゝひ置事うゝと貳ゝ侍を呼寄。我ハ思ふ子細有て奥州へ落
行時を待て再び天下を奥覆せんと志と所こ。故ゝ南部太郎伊達六郎ゝ
案内者ゝれば召具べし。其余の面々ハ我ゝ替りて自害し。此屋形ゝ火を
懸て我も腹と切て焼死る體と欺ゝ可見と命じ給ふ。二十余人の
侍一義も不及御宣ゝ可随べ。と貌をつゝ。人夫の躰ゝうゝて中間二人ゝ物具させて馬ゝ乗中黒の
狩を付させ。四郎入道と鞭ゝ乗て血の付る帷を引覆ひ源氏の印ノ
手負て本國へ帰る真似して。武蔵の國まで落ゝる。其後残ゝ置る侍
ども。中門ゝ走り出ハ早御生害あり。ゝ志あゝ者ハ御伴申せと呼

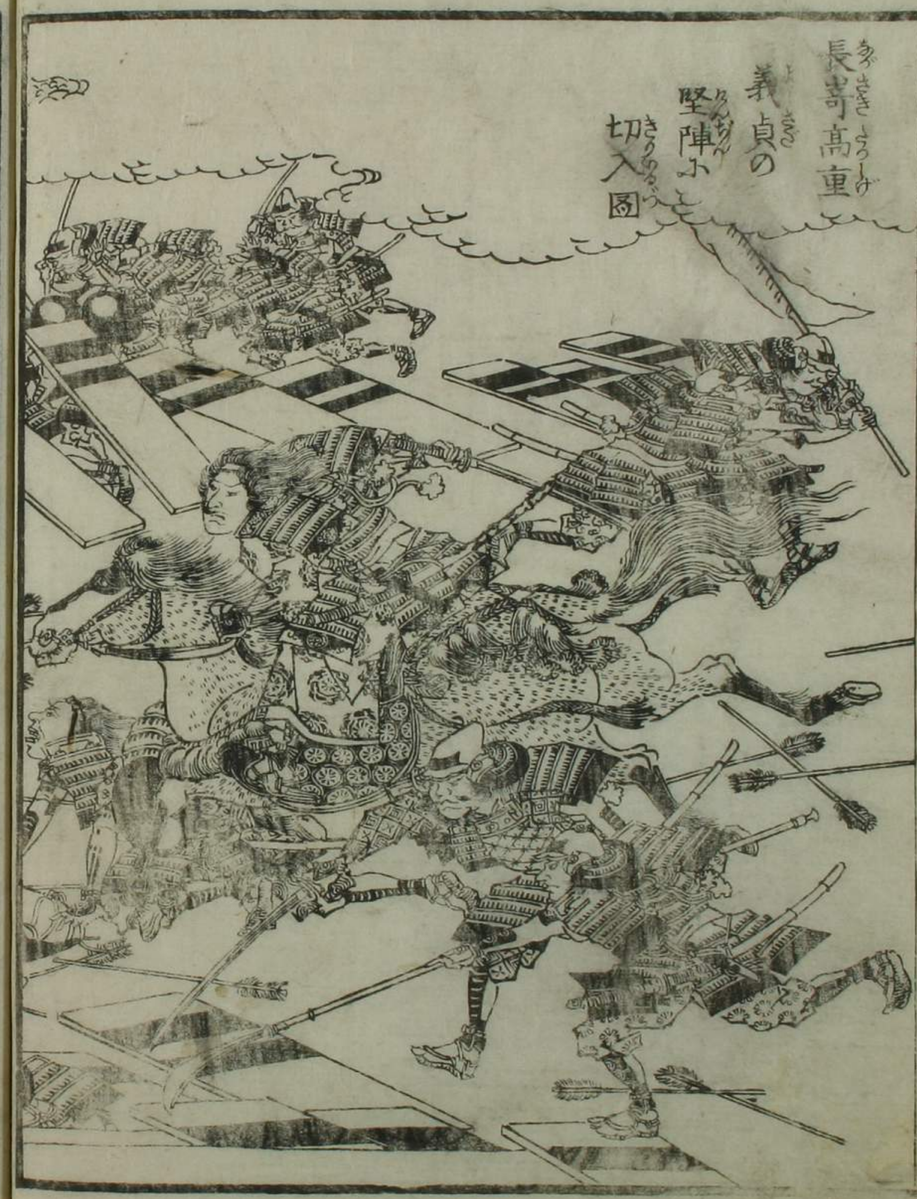
て屋形に火を懸煙の中に並居て。二十余人一度に腹をぞ切さうける。是を見て庭上門外に袖を連ねる。落残りたる兵六十余人我劣じと腹掻切猛火の中へ飛入こと尸を不残灰とぞなれば四郎左近太夫入道の存生被申ける知者更にちがふ。其後四郎入道密に京都へ入て西園寺の家に仕へ建武の間京都の大将にて。時奥と名乗こと此入道慧性是なり

○評に云恵性存命の計深ふして過さり。敷代召遣ふ良役主と共に自害してさへ稀なるに。益て主を落して主に替て自害せんとあめる良役ハ市の中の虎に同じ。然るを悉く自害させて。入道摂生を得る事何ぞ不仁の甚さや。何に後に至りて何の功をも不成最不覚なり。何ぞ楠正成が赤坂を立退とき。城外の死骸を集めて焼て敵を欺さしむ及ん哉

高重謀欲討義貞　高重悪戦退葛西

爰ハ長寿次郎高重ハ始武蔵野の合戦より今日に至るまで。夜晝八十餘ケ度の戦ひに毎も先を懸圍を破て自相當るを其数を不知故ハ手の者若黨次第に被討て。今ハ僅に八十余騎に成にけり。五月廿二日に源氏早谷々へ乱入て。當家の諸大将大略討死し又自害あり。と聞へられむ。高重誰堅めさる陣にも不云唯敵の近付處へ弛合。味方を助て八方の敵を拂ひ。四隊の堅めを破て馬疲をもれば乗替。太刀を打折ては帯替て。自敵の大将を討事七人。陣を破る事八ケ度其行歩徳倉中の敵味方ハ裏て人の耳目を驚しめ。角て相摸入道殿の御坐葛西谷へ帰り参て中門に畏り泪を流して申ける。高重數代奉公の義を忝ふして。朝夕恩顔を拝し奉りしに。卒名残今生に於ては今日を限りと

こそ覚へ候へ。高重一人敷ケ所の敵を打散じて毎度の戦ひに打勝ハと
いへども方〻の口〻皆責破らるゝて。敵の兵糧倉中に充満仕ハ上ハ終矢長
に成ひハとも今ハ不叶ハ唯一ハ助に敵の手に懸らせのゝ様に思召
定めさせうひ。御覚悟可有之様に恐奉願度に御坐ハ。但し高重思ふ
子細のハ今一度敵の中へ懸入存分の合戦可仕に成ハ是非高重帰り
参て勧申さむ程ハ無左右御生害不可有ハ。我思ふ軍不叶と見候ハ
速に独帰て冥途の御供可申にてハとて。又東勝寺を打出て義貞陣
に独向ふ。相摸入道も遥に見送りて是や限うらゝんと。名残惜気に伸上り
泪ぐゝぐゝぞ被立ける。去程に長崎高重ハ打残されさる良等八十余人に
向つて申〻ハ今ハ是をもり傍々ありさるべしとて。可勝軍ともあらば早々御
方へも落行一旦の難を避れ身命を継ハへと再三強て申れども。家の子熊谷
新助不被謂度を宣ふのうふ。敷年我ホを扶助の事ハ加様の御大度
に會て身命を捨御用に立て骸を軍門に曝し候度我〻の本意に不候や。義
なき者ハ皆早落失ぬゝん。今此に在する人〻皆闘死と意に懸る人前にて
や候らん。但し此人〻の中に落んと思ふ人あらば早く落らるべし。先某に放て
ハ御供して候へと申れば八十餘人の者共声〻に誰ハ落ハ落ハ皆御供
あて侍らとぞ。高重嬉〻ハ方々去ば晴〻と十死一生の軍とて快く討
死をべし。衣去に思慮をめぐらし新田ゞ勢ハ普代恩顧の郎従ゆあるぞ。
國々の集り勢にて一旦催促に応て付随ひさる兵さう。何率覬ひ寄て義貞
一人をとゞめ討取ぬべ。別に手に立者やあらん皆尚に木の葉の散如く己が國
〻へ北下りうん。然らば思ひの外の勝を取事此一戦にあるべし。迚も死る命を
いざやと勇こそれば。郎従鬼も角も御意に随ひ奉らんとて。各勇気を含で
打出るう。高重其日の出立ハ甲を脱捨鍬の帷の月と日を推さるゝ精好
の大口の上に。赤絲の腹巻して。ふ手をぶ不差兎雞と云坂東一の名馬に金


長嵩高重
義貞の
堅陣ふ
切入図

見の鞍に小總の鞦懸てぞ乗こうける。是を最期とおもひ定められた先崇壽寺の長老南山士雲禅師に参じて。法要を尋問せんと案内を申入られば。長老威儀を具して出合れぬ。方々の軍急にして具足を著こうられば。庭ふ立うぐうう左右に揖して問曰。如何曼男士徳麼之事。知尚答曰吹毛急用不如前高重此一句を聞て頓に妙要を會得し。門前より馬引寄てやらうと打乗。八十余人の兵を前後に相随へ。笠符うみぐう并閑に馬と歩ませて敵陣に紛入。其志偏に義貞に相近付。組打して撲て勝負と決せん為なり。高重旗をも不差打物の室をとどこうる者ども。源氏の兵敵と云更に不知ろうろうや。臨〻と中を開て通しられば。高重義貞に近付事僅に半町計に。ずんやと見へける處に義貞の運や強うりん。由良新左衛門これを見知て。義貞の前に立塞り。只今旗をも不指相近付勢は長嵜次郎と見るぞ。去勇士ろれば定めて思ふ處有てぞ是までぞい来るらん。余まるみ漏まるみ者〻も大音挙て呼はりられた。先陣に馳へうる武蔵の七黨三千余騎東西より引裏て。真中に追取込我討止んと進こられば。高重は心の上に相違ちううと見るより。八十余騎の兵をひしくと一所に寄て。閧音に同と合三千余騎の郡る中を懸拔懸入立交り。彼に露を此に隠を裏散離合に責戦ふ有様。須臾に変化し前に有うとすれば忽焉と後に有。味方うと怪めば此と敵ぢう。十方ふ分身万卒に當りられば。義貞の兵高重ぢ有所を見定められば。多く同士打をぞ仕こうる。長濱六郎是を見て云甲斐なきく人〻の有様うみ。敵も皆是分と不分とうつぐぞ。其手〻の中ふ紛を有ば其を分ふ組で討と下知しられば甲斐信濃武蔵相模の兵〻も押並へていもぞと組組で落て首を取もあり又被捕も有。芥塵掠天汗血地糊糊と。其有さま〻項王が十面埋伏の兵と靡し。魯陽が日を三舎に返し戦ひも是に不過とぞ見へこうる。斯る中に高重は唯義貞に近んと馳廻

くれども元来義貞は九郎義経が軍法と能知て陣の備最厳重なる上馬廻りに栗生篠塚畑豆理蓑梅林など力量人に勝たる兵六人あり義貞又力量大形の人に勝たる三四人の分限ありとぞ殊に今度の合戦御方勝ぬると見れば陣法弥厳鉾先陣に武蔵の七黨三千余騎弓手に由良あり妻手に長濱あり義貞の馬回りに六千余騎を二手に分て半町を隔て前後を圍ム其間に舟田長門守里見新兵衛尉二人首の取次島名の軽重を披露ス後の左右に江田兵部大輔二千余騎大江田権七郎二千五百余騎にて磐石の如何なる敵も近寄事を得ざりけり然ども高重武勇勝れたる者にて多くの陣を懸抜て是まで寄来る今は八十余騎の良等僅に八騎に被討成られども退く心半点もなく猶義貞を伺ふて近付敵を打拂ひ動もすれば差違て義貞兄弟の本陣を目に懸て回りけるを武蔵國の住人横山太郎重真押隔て是に組んと馬を進めて相近付ぬ高重も能敵なまば組んと懸合せて是を見るに横山太郎重直なり扨は合ぬ敵ぞと思ひられども向ふより近寄事なれば無是非重直を弓手に受太刀をずぶと抜て甲の鉢と菱縫の板迫破著さるれば重直が馬は屈居て被打居小膝を折て伏られば主の重直は二つに成てぞ失さるる同國の住人庄三郎為久是を見て横山の敵なれば遁もまじいざや組んと大手を広げて弛懸る高重くくと打笑ひ薫の者共に可組い横山なども何ぞ嫌ん合ぬ敵に組ざる様いでいざ知せんとて為久が鎧の上巻懸で中ゆ提げ弓杖五丈計安と投捨て為久は元より其人飛礫に當りける武者二人馬より倒に被打落血を吐てこそ死てんげる高重今は迚も敵に被見知ぬる上は義貞に近付ばやとおめひろれば馬懸居て大音揚桓武天皇第五の皇子葛原親王三代の孫平将軍貞盛より十三代相摸守高時の管領長崎入道圓喜が嫡孫

丶次郎高重武恩を報ぜん爲丶討死をゝぞ。高名せんと思ふ者
いまだ組んと云ふ丶。鎧の袖を引ちぎ〳〵草摺四五枚切落太刀
を朝丶收めて左右の大手を播て。此丶弛替ひ彼丶弛合大童丶成て
驅散丶驅崩を處丶。良等二人馬の前丶弛塞て是ハ何ゝる御事
て候ぞ。御身こそ加様丶敵を懸破りゝひ〳〵ど。早谷々〳〵敵の大勢乱
入火と懸申さめ所もなくゆ〳〵だ。東勝寺とても危く存て候急ぎ御敵
候ひて守殿丶御生害と進め申させゝと申くれば。高重馬と引留
め余り丶人の遁ゝる面白さ丶。大殿丶約束つる事を忘まめ。残去敵り
矢ゝんとて。主従八騎山内より引帰しくれだ。逃て行とや見さゝる武
藏國の児玉黨五百余騎。さゝ〳〵返せと詞て馬と爭て追ゝけゝる。
高重もじの奴原ゝる。何程の事をゝ仕出をゝぢき。唯其侭丶打捨て
退くべしとて不知負して打ゝるゝ。頼りゝ馬とゝゝめて手繁く追懸
たりゝ。高重主従八騎屹と見帰て。馬の轡を引回すぞ〳〵見へしが。
烈風の如く児玉ゝ五百余騎丶弛入て散〳〵丶驅くゝ。閑丶引ば急ゝ
追追ば返して驅ちゝ。退けば追をゝる。山内より葛西の谷の口を
十七度まで返し合せて。遂丶五百余騎を追退け。閑と打て葛西
の谷へぞ參りゝる

○許丶云高重敵の堅陣丶懸入八十余騎の良従悉く討
死。主従僅丶八騎と成て其志を空しくゝもとゝ。
勇と義と忠と兼備ゝる兵ゝ。無義ば命を不捨無勇
ば敵を不討無忠ば義貞を不覩。実丶古今の勇士と謂べし。
義貞將の法を知ゝるを身命甚危ふゝん。能源廷尉
義経の軍法を得ゝるこそ不慮の難を遁ゝるゝ將
る者豈武の道を学びざゝんや

高重剔腸魁死出　高時一門滅東勝寺

島重も已ぞ鎧ゝ之虚の矢二十三筋蓑の毛の如ゝ折懸て中門ふ入て伺候しられば。祖父の圓喜入道待請て何とて今まで遅うつるぞ。合戦の様い如何ゝ今い是迄然と尋弘られべ。高重畏て申様。参ひ某深思慮を廻しひゝ。義貞一人ぞ〻討取ひで其余ゝ取ゝ不足。與しゝさろ集勢ゝ〻ぐ出ぐ。義貞皆國ゝへ逃帰りひんと存ひ間。長恐當家の存亡今日一戦の勝敗ふ懸りひ所ゝと思ひ定めひふ依て。何卒惣大将義貞ゝ近付引組て勝負と遂むと存ひひて。二十四度まで駆入ひども終ゝ近付事を不得其人と覚しき歟ゝも出合候ゝぐ。請ろう黨の奴原四五百人切捨てぐ候ひつゝん。哀ま罪の事ぞ〻ゝ。猶も奴原と潰面へ追出て。弓手妻手ゝ切分或い車切胴切竪破ゝ仕り弃ゝ存候ひつま

ぞ〻。上の御事如何と御心元なく存候ひて罷帰参て候と聞も涼〻く語ゝ〻ぐ。最期ゝ近き人々も少心を慰めゝ高重重て申様已前申上ひ通義貞ぞ〻ゝ討取ひひ事隠便ゝひぐ。此事不成ひ上へ最早御運も是迄ゝ覚へひ早〻御自害ひとすめられぐ。入道常〻不覚悟の人られば腹と切んとひふ術もなく。萬あさまさる躰ゝ成ひぐ。長崎四郎高重ぞ耳元ゝ差寄て私言ゝ〻ぐ入道殿の御事一先落〻奉らんひ如何あゝんと申ゝ〻ぐ。高重頭を打振て如何ゝも叶ひ候まじ。數代の冨貴今可終時来りぬと覚ひ凡天地の間ゝ何物ゝ常住うる事ひぞ。孔子も罪を天地ゝ得つまぐ祈ゝ〻ゝ所ゝ〻と申置れひ者も。其上伯父ゝそひ新左ヱ門高資ぞ行跡人望ゝ背き。佛神の冥慮に被放ゝ〻ゝひ不思食ひ哉大殿へ御遊まぐゝて國の事ぞ不被了食候ゝ。伯父高資侈高ゝて人の恨耳多く候今如是の乱出来て殿の御

長崎高重
高時を
勵して
自伏の圖

一家滅亡に及ぶ事皆伯父にて候者の政道の我侭ゆゑに依て之を然に入道殿を落し参らせられぬと云て我一類申供不申ぬべし何者ゆゑ申手を引其雅を助奉らんや。又入道殿を如何計痛しく思ふ人ありとも我一類を悪まぬ者なくれば御方に付者あるべし。迎も道々道々北條の何某にて鎌倉を落て。此彼の野山にて雑兵の手に懸り亡ぬる後代の嘲に最口惜しかるべし。公達両人四郎太夫入道殿の御計にて落参らせ給ふ上。敷代積善の餘慶御一家に止らぬ。御運終に開くて公達の内一人なりとも御代に立せ給ひで侍らんや。敗軍の將は二度不可と申事の侍るぞ。唯今入道殿御自害の外不可有と。御前に進み早く敵の手に不懸給様思食切せ給へ。高重先を仕て候恐手本を見せ進らせ申らむと云侍に。胴計残る鎧脱て抛て。御前にあり合る盃を執て舎弟新右エ門高光に酒を取せ。三度傾けて摂津刑部太夫入道道準に前に置。思ひ指申もぞ是を看と云て。左の小脇ふかと突立て。右の傍腹まで切目長く掻破て腸を手繰出し道準に前にぞ伏さるる。道準盃を取て適佳肴や何なる下戸なりとも此を呑ぬ者あらじと戯れて其盃を半分計呑残して諏方入道直性に前に指置ぬ。直性其盃を受て心閑に三献を傾け相模入道殿の前に盃を差置て。若者共随分芸を尽て被振舞ひ。手老れたりとて争ひ嘲ざ。今より後は皆是を送り者に仕へべしとて。腹十文字に掻切て其刀を抜て入道殿の前に指置さるに。これに被励て相模入道も腹切被申。名れば城入道時顕も法づひく腹をぞ切さるる。長崎入道円喜は是までも猶心臆して腹も未切さるる。孫の新右エ門高光今年十五にてありけるが。祖父円喜の前に畏て父祖の名を顕さんとて孝行とも云事ぞ。ていうれば佛神三宝も定めて御免あるべ候さんぞ

〻て祖父圓喜ゞ肱の懸りを二刀さして。其刀ゝて已ゞ腹を掻切て祖父を取て引伏其上ゝ重つてぞ卧さゝる。是ゝ続て堂上ゝ座を列さゝ一門他家の人〻諸肌を推脱〻て腹を切人も有。又自頸を掻落す人もあり。思ひくの最期の體殊ゝ由々しくぞ見へさゝる。其人々ゑ金沢大夫入道崇頭佐介近江前司宗直并名宇駿河守宗頭同左近大夫将監時頭小町中務大輔朝実常盤駿河守範貞名越土佐前司時元伊具越前前司宗有城加賀前司師頭秋田城介師時城越前守有時南部右馬頭茂時陸奥右馬助家時相模右馬助高基武蔵左近大夫将監時名陸奥左近将監時英桜田治部大夫貞國江間遠江守公隆阿曽弾正少弼時治遠江兵庫助頭勝備前左近大夫将監政雄坂上遠江守貞朝陸奥式部大輔高朝城介高量同式部大輔高頭同美濃守高茂新田式部大夫隆時秋田城介入道延明明石長門助入道忍阿長崎三郎左衛門入道思元攝津宮内大輔高親同左近大夫将監親貞等三十二人其外名越の一族三十四人鹽田赤橋常業佐介の人〻四十六人。物じて其門業さる人二百八十三人皆我先〻思ひくゝ切腹を。中ゝも苅田隆時ゝ人〻ゝ後まて腹を切兵を下知ゝて屋形ゝ火をかけゝゝ猛火昌ゝ燃上り黒煙天を掠さゝ。庭上門前ゝ並居さる兵是を見て或ゝ腹を切て炎の中ゝ飛入もあり。又ゝ父子兄弟差違へて重り卧もあり。血ゝ大地ゝ漫〻として洪河の如。戸ゝ行路ゝ横て黒〻さる郊原の如。死骸ゝ焼て見えぬ。後ゝ名字を尋めれば此所ゝ死さる者惣て八百七十余人〻。此外門業恩顧の者僧俗男女を不謂冏傳〻泉下ゝ恩を報ぜる人漁倉中ゝ縊鳴呼此日何さる日ぞや。年月自押移て元弘三年五月廿二日と申ゝ。平家九代の繁昌百六十年一時ゝ滅亡ゝて。源氏多年の蟄懐

一朝に聞る事を得さう。是皆相摸入道の行跡長崎島資ゞ政重の横しまより。事発まうと覚へ浅間敷こうゝ有様なり

○傳に云長崎高重頻りに自害を勧められども。高時忙然として悶を果さる計あて物をも不謂。高重去ば先手本仕り侍らんとて如本文腹を切りうども。猶憤りて自害の気色なり。高重ゞ舎弟新右ヱ門島光生年十五歳なりゝゞ進み出て祖父四喜ゞ内ひ入道殿の御事何卒御介錯いへと申されども。四喜も心臆して腹も切であるゝ程の事なれば泪くして不謂。爰に於て新右ヱ門申様。某ゞ御介錯如何と存いへども。佛神三宝も御免ていわゞ各も御免いへ。兄高重ゞ申ゞく迚も御通を右同じきの故敵の手へ渡り雑兵の手に懸せうりんも。後代の恥辱意うき事に侍らずやと云も不果つと立て相州禅門の肱の懸りを三刀刺て推伏無是非頸を給て後新右ヱ門又祖父四郎に向ひ。父祖の名を顕はしを以く子孫の孝とする事なれば。神祇何ぞ御免なうんやとて。祖父四喜ゞ肱の懸りを二刀刺て其上に重り已も其刀を以て自害し早め。嗚呼新右ヱ門高光年未ゞ若しといへども。相州禅門及び。祖父四喜の未錬なるを見るに不忍して刺殺めの事。忠と云孝と云其勇まし兄高重に双もなき可謂也。此事其座にありし通世者の生捕れて斯い語りしとぞ。然るを如本文書し事ハ異朝へ其侭渡さんハ我朝の恥なりとて。将軍義持公の仰を以てかく書せらるゝ。最も情有て覚へ